

〔資料紹介〕

A. グラムシ『サバルタン・ノート』 関連草稿について

松田 博*

本稿はA. グラムシ『獄中ノート (Quaderni del carcere)』の「Quaderno 25 (第25ノート)」(「サバルタン・ノート」)の翻訳紹介である。この「ノート」はリソルジメント期の国民国家形成過程における「千年王国運動」の特質、サバルタン論(従属的社会集団論)分析の方法論、「ホモ・ファーベル(工作人ないし制作者)」問題、古代ローマ時代および中世コムーネ時代におけるサバルタンである奴隷や下層民、さらにサバルタン(従属的社会集団)分析の方法論、古代ローマ時代のサバルタンたる奴隷(制)問題、サバルタンと「ユートピア」思想との相互関連性、サバルタン問題と「科学主義」(とくに実証主義)との関連性に関する草稿によって構成されている。いずれもグラムシの「サバルタン研究」の歴史的、理論的研究にとって基本的な意義を有する諸草稿と評価しうるものである。

キーワード：グラムシ、『獄中ノート』、サバルタン、千年王国、ホモ・ファーベル、スパルタクス、
チョンピ、ユートピア、科学主義、実証主義

はじめに

すでに本誌(第43巻第3号, 2007)の拙稿「グラムシのサバルタン研究にかんする覚書」でも言及したように、グラムシの『獄中ノート(Quaderni del carcere)』の「Quaderno 25(第25ノート)」(通称「サバルタン・ノート」)は、グラムシのサバルタン概念を考察するうえで基本的な意義を有する草稿が含まれている。Q25は「歴史の周辺にて(従属的諸社会集団の歴史)」という表題をもつ「ノート」であるが、本稿では、その8編の草稿を紹介しておきたい。第1草稿は、リソルジメント期の国民国家形成

過程における「千年王国運動」の指導者ダヴィデ・ラザレッチェの思想的特徴と国家の対応を分析したものである。第2草稿は、サバルタン運動分析の方法論に関している。第3草稿はメモ的なものながらサバルタンと「ホモ・ファーベル」問題に関するものである。第4草稿は、古代ローマおよび中世コムーネ(都市国家)時代における奴隷や平民層(popolo)の具体的な実態に関する分析である。いずれもグラムシのサバルタン(従属的的社会集団)研究の構想にとって重要な意義を有すると考える。第5草稿の「方法的諸基準(Criteri metodici)」は、第2草稿の「方法論的諸基準(Criteri metodologici)」を内容的にさらに発展させた草稿で『サバルタン・ノート』の中心的草稿である。第6草稿は、第1、第4草稿とならんでサバルタン(従

*立命館大学名誉教授

属的社会集団)の歴史的形態に関する草稿で、この3草稿によって、ローマ時代の最大の奴隷反乱である「スパルタクスの乱」、中世の都市国家(自治都市)時代の代表的な下層民衆の蜂起である、フィレンツェの「チオンピ(毛梳き工)の乱」、そして近代の国民国家形成期における代表的な「千年王国」的民衆運動である「ラザレッティ事件」という「サバルタン集団の歴史」に関するグラムシの問題意識が明瞭に理解できる草稿である。第7草稿は、とくにT.モアの「ユートピア」やカンパネッラの「太陽の都」などの「ユートピア」表象とサバルタン集団の意識との関連性を掘り下げようとした草稿であり、「サバルタン性(Subalternita')」とユートピア思想との関連性を考えるうえで重要な内容である。第8草稿は、科学主義(とくに実証主義)がサバルタンについての表象形成において果たした重要な役割(ロンブローソなど)に関する草稿である。この8草稿以外に『サバルタン・ノート』に収録されなかった草稿がかなり存在するが、いずれもこの8草稿に集約された各主題と関連する草稿であり(とくに方法論と歴史的具體例に関する草稿が多い)、その意味でこの『ノート』は、グラムシのサバルタン研究の問題意識と方向性を明確に示すものと考えられる。

*Quaderni del carcere, a cura di V. Gerratana, Einaudi, 1975, pp2279-2294

1 第1草稿 「ダヴィデ・ラザレッティ (Davide Lazzaretti)」

『フィエラ・レツテラリア (Fiera Letteraria, 文芸フェアの意)』誌の1928年8月26日号に掲載された記事において、ドメニコ・ブルフェレ

ッティ(Domenico Bulferetti)は、ダヴィデ・ラザレッティの生涯と文化的形成についてのいくつかの要素を想起している。

参考文献:アンドレア・ヴェルガ(Andrea verga)『ダヴィデ・ラザレッティと精神錯乱』(ミラノ,レキエディ社,1880),チェーザレ・ロンブローソ(Cesare Lombroso)『狂人と異常者(Pazzi e anormali)』(これは当時の文化的流行であった。つまり集団的な出来事の根源およびその広がりや集団性の理由を研究するのではなく、その出来事の主人公だけをとりあげ、検証されてもおらず、また様々な解釈が可能な諸動機を重視して、その人物の病理的伝記の作成に限定するのである。つまり社会的エリートにとって従属的諸集団(gruppi subalterni)の人々はつねになんらかの野蛮さや病理的をもっているときみなされるのである)。『ダヴィデ・ラザレッティ,アルチドッソの預言者の生涯(Una Storia di Davide Lazzaretti, Profeta di Arcidosso)』は、ラザレッティの高弟の一人であり、オラトリオ会の元修道士フィリッポ・インペルウツィによって1905年シエナで出版された。ブルフェレッティによれば、他にも護教論的著作が存在するが、同書がもっとも注目すべき作品である。しかしラザレッティに関する「基本的な」著作は、ジャコモ・バルゼロッティによるものであり、その初版と第2版(ザニケッリ社)は『ダヴィデ・ラザレッティ』という書名である。同書はその後の版で、『モンテ・アミアータとその預言者(Mnte Amiata e il suo Prefeta)』という書名で加筆および一部修正され出版された(トレヴェス社)。

ブルフェレッティは、ラザレッティ運動の大義が「きわめて特殊で、参加した人々の精神的、文化的状態に強く依存している」のだが、

また「美しい故郷への自然な愛が少々(!), イポリト・テーヌ (Ippolito Taine) の理論からの影響が少々」とバルゼロッチェが主張していると信じている。しかしながら, バルゼロッチェの著書は, ラザレッチェに関するイタリアの世論形成に貢献したのだが, それは文学的愛国主義 (いわゆる祖国愛!) の表現以外の何物でもないと考えるほうが, より明瞭である。それは, このような不安の爆発の個々の事例にたいして個別的, 個人的, フォークロアの (民間伝承的), 病理的等々の説明を与えることによって, 1870年以降のイタリアの全般的な不安 (malessere) の原因を隠蔽しようとするものであった。同様のことがイタリア南部や島嶼部の「山賊 (brigantaggio)」についても, より大規模に生じたのである。

政治家たちは, ラザレッチェの殺害が, きわめて残忍かつ冷酷に準備され, 行われたという事実に関心を示さなかった (実際, ラザレッチェは射殺されたのであり, 闘争のなかで殺害されたのではない。政府が当局に伝えた内密の訓令を知ることができれば, 興味深いであろう)。ラザレッチェが, 共和制を賞賛しつつ死んだにもかかわらず, 共和主義派は (調査し, 真相を明らかにすることに) 関心を示さなかった (農民のなかに拡大する可能性のあった, この運動の共和主義的傾向という性格が, 主人公の抹殺という政府の意志決定に特に影響を及ぼしたことはたしかであろう)。おそらくそれは, この運動のなかで共和主義的傾向と宗教的・預言者の要素とが奇妙に混合していたことによるものである。しかしながら, まさにこの混成が, この事件の主要な特質を示している。というのはそれがラザレッチェの人望と自然発生性を表わしているからである。さらに次の点を考慮すべ

きである。つまりラザレッチェの運動は, ヴァティカンの勅令「ノン・エクスペディト (non-expedit)」と関連していたということである。この運動は, 聖職者の政治的棄権主義の結果として, また合法的諸政党が存在していないなかで, 宗教性, 狂信性と農村部において醗酵しつつあった初歩的な形態の諸要求とが混合されて, 農民大衆のなかから生まれてくる地方指導者を捜し求めていたことの結果として, 農民のなかに反逆的で民衆的, 萌芽的な傾向が生まれうるということを, 政府につきつけたのである。

さらに考慮しておくべきもう一つの政治的要因は, つぎのことである。それは二年前から左派が政権に参加したことである。それは民衆のなかに, 結局は失望に終る希望と期待の高揚をもたらした。左派が政権参加したということは, 反動的かつ教皇派, 聖職権主義者 (clericale) 等とみなされる可能性のあった一人の男の犯罪的な殺害にたいする闘争の支援において曖昧であったことの説明となりうる。

ブルフェレッチェは, バルゼロッチェがラザレッチェの文化的素地について研究していないと述べているが, バルゼロッチェはそれについて述べている。そうでなければブルフェレッチェは, その当時ミラノで印刷されたリーフレット, パンフレット, 民衆向け書籍などがモンテ・アミアータにも大量に (!? ブルフェレッチェはそれをどこから知りえたのであろうか? さらにとくにかつての農民の生活を知っている者にとって, 運動の広がりさと深さを説明するのに「大量」ということは必要ないのである) 届くのを目にしたということになろう。ラザレッチェは無類の読書家で, また荷馬車の御者という職業ゆえにそれらを手に入れることが可

能であった。ダヴィデ・ラザレッティは、アルチドッソで1834年11月6日に生まれ、1868年まで父親の職業を続けていたが、このころから不信心な雑言を口に出すことを止め、改心してサビーナの洞窟で贖罪生活を始めた。そこで彼は一人の武人の霊を「見た」のだが、その武人は、ラザレッティ家の祖先である、フランスの王の庶子マンフレッド・パラヴィチーノであることなどを彼に「明かした」のである。デンマークの学者のエミリオ・ラスムッセン博士は、マンフレッド・パラヴィチーノがジュゼッペ・ロヴァーニの歴史小説の主人公であることを見出したが、そのタイトルはまさに「マンフレッド・パラヴィチーノ」であった。この物語が進行し、諸々の冒険があるが、洞窟で「啓示」を受け、この啓示からラザレッティの宗教的布教活動が始まる。

これにたいしてバルゼロッチェは、ラザレッティが1300年代の伝説の（シエナのジャンニーノ王の冒険）に影響されていると考えており、ラスムッセンの発見については、彼の著書の最終版において触れているが、ラスムッセンへの言及はなく、ジャンニーノ王についての記述は元のままで、ラザレッティの解釈について曖昧に述べている。しかしながらバルゼロッチェは、ラザレッティのその後の精神的発展やフランス旅行、さらには「英知と博学の人」ミラノの司祭オノリオ・タラメリのラザレッティへの影響を研究している。タラメリは、君主制反対の文章を書いたためミラノで逮捕されたが、その後フランスに逃れた。ダヴィデはこのタラメリから共和制についての教示を得た。ダヴィデが掲げた旗は、赤の地に「共和制と神の王国」と記されていたが、ダヴィデが殺害された1878年8月18日の行進のさいに、彼は信奉

者に共和制を要求するか否かを問うた。彼は、熱狂的な「Si（イエス）」の声に対し、「共和制は今日から始まり、世界へと広がる、しかしそれは1848年の共和制ではなく、神の恩寵（Grazia）の戒律を受け継いだ法（Diritto）の規律による神の王国であろう」と答えた。ダヴィデの回答のなかには、いくつかの興味深い要素が存在しているが、それはタラメリの言葉についてのダヴィデの回想と関連付けるべきである。つまりトスカーナ地方では農民層に良い記憶として残っていない1848年と区別しようとしていること、および法と恩寵との区別である。

ラザレッティの劇的な事件は、殆ど同時に起きたベネヴェント義勇団の「企図」と関連付けてみるべきである。マラテスタ（Malatesta）の裁判に連座した司祭たちや農民たちはラザレッティ派の人々と類似する考え方であった（たとえば、まさにベネヴェント義勇団に言及しているニッティ（Nitti）のカトリック社会主義にかんする著書で、ラザレッティに触れられているかどうかを調べてみることに）。いずれにしてもラザレッティ事件は、これまで文学的印象主義の観点から見られてきたが、それだけでなくこの事件は政治的—歴史的分析を行なう価値があるであろう。

ジュゼッペ・ファティーニ（Giuseppe Fatini）は、ラザッティ主義が今なお生き続けていることを『図説トスカーナ』（『マルゾッコ』1932年1月31日、参照）で注目している。ダヴィデが憲兵隊によって殺害された後、ラザッティ主義のいかなる痕跡もグロセートのアミアータ地域においては永遠に消滅したと信じられていた。ところが、ラザレッティ主義派、あるいは好ましい呼び名とされたダヴィデ主義的キリスト教徒は生き続けていたのである。近隣の村落に若

千の新しい帰依者も点在していたが、その多くはザンコーナのアルチドッソ村に集まり、ラザレットの追憶のなかで互いの結束を強めるための新たな養分を世界大戦から得たのである。弟子たちによれば、ラザレットは、世界大戦からカボレット、ラテン諸国の国民の勝利から国際連盟の誕生に至るまで、すべてを予見していたという。信者たちは、時おり彼らの狭い地域から外に出て、「ラテン国民の兄弟たち」に彼らの宣伝用冊子を配布している。その冊子には、彼らの師が未発表のまま遺した詩を含む多くの文章、それは弟子たちが大切に保管していたものだが、その一部が収録されている。

しかしながらこのダヴィデ主義的キリスト教徒たちは、何を求めているのだろうか？ 聖人たちの言葉の秘密を洞察することのできる恩寵にまだ触れていない者にとって、彼らの教義の本質を理解することは容易ではない。その教義とは、従来の宗教的教義と、様々な社会主義的な格言および人間の道徳的贖罪やカトリック教会の精神と位階制の全面的な刷新なしには実現することのできない贖罪にたいする一般的な示唆との混合物である。

ラザレット主義派の「クレド (Credo 使徒信経)」をなす「聖霊信経 (Simbolo dello Spirito Santo)」の結びの第24条は次のように述べている。「我々の創立者である聖職者ダヴィデ・ラザレットは、ローマ教皇庁によって裁かれ、有罪とされたが、ダヴィデは実際には聖霊の法と普遍的改革の第三の律法のおかげで、全人類に対する完全な贖罪の実行を導くために来られた人の息子として、現世におけるわが主イエス・キリストの再来の真の生きた姿としての主であり、審判者としてのキリストに他ならない。贖罪は、聖なる誓いを確かめる唯一の点

であり、唯一の律法においてカトリック教会の内部でキリスト信仰にすべての人々を結集せねばならない」。(第一次)大戦後、ラザレット主義派は、一時期「危険な道」に向かいかけたが、そうした方向から適切に引き返し、勝利者に全面的な同意を与えた。それは必ずしもカトリック教会—「教皇崇拜の宗派」との意見の相違ゆえではなく、ラザレット派の信徒たちが、イエス・キリストと「改革」(la Riforma 教皇庁の反宗教改革を指す—訳者)を粘り強く護持しているからこそ、ファティーニはアマータの宗教現象に関心をもち、研究する意義があると考えたのである。

2 第2草稿 「方法論的諸基準 (Criteri metodologici)」

従属的社会諸集団の歴史は、必然的に断片的であり、エピソード的である。この諸集団の歴史的な活動は、たとえそれが一時的なものであっても、統一にむけての傾向があることは確かではあるが、この傾向は支配諸集団の主導性(イニシアティブ)によって常に打ち砕かれ、したがってこの歴史の周期が、成功によって完結し、達成された場合にのみこの傾向は明らかとなる。従属的諸集団は、反乱や蜂起の場合においてもなお常に支配的諸集団の主導性のもとにおかれている。つまり「恒久的な」勝利のみが、即時ではないが、その従属性を打破するのである。

事実、従属的諸集団が勝利を得ているように見える場合でも、その諸集団は、不安定な防御状態にあるに過ぎないのである(この真理は、少なくとも1830年までのフランス革命の歴史で、論証することができる)。したがって従属

の諸集団のどのような自立的発意（イニシアティブ）の痕跡も、総合的な歴史家にとって極めて大きな意義を有するであろう。それゆえに、このような（従属的諸集団の）歴史は、個別的研究論文（モノグラフ）によってしか研究できないものであり、またどのような個別的研究論文も収集することが常に困難な多くの資料を必要とすることが明らかとなるのである。

3 第3草稿 「アドリアーノ・ティルゲル (Adriano Tilgher), ホモ・ファーベル (Homo faber) 西欧文明における労働観の歴史, ローマ, Libreria di Scienze e Lettere (科学・文学書店), 1929, L. 15」

*QC, p2284, A草稿はQ1§95 (QC, p92) であり, C草稿も同一の文章である。同書は1929年にローマで出版されたが, グラムシは獄中で入手できなかったため, 書名のみを草稿として記したと考えられる。著者のA.ティルゲルはベルグソンの影響を受けたリベラルでファシズムに批判的な知識人であり, そのため獄中での入手が出来なかったと考えられる。グラムシにとってサルタンと「ホモ・ファーベル (工作人ないし制作者)」との内的関連性の解明は, 「労働における従属性」克服というテーマの重要な一環である。この点については, 拙著『グラムシ思想の探究』第5章を参照されたい (新泉社, 2007)。小原耕一・村上桂子訳『ホモ・ファーベル』社会評論社, 2009参照。

4 第4草稿 「ローマ時代および中世における従属的社会諸集団の歴史的発展に関する若干の一般的覚書」

エットーレ・チコッティ (Ettore Cicotti) の論文「ローマの歴史的伝統における「真実 (Verita')」と「確実さ (Certezza)」の諸要素」(『歴史的対照 Confronti storici』に収録)にはイタリアの「都市国家 (コムーネ)」時代の民衆的諸階級の歴史的発展に関する注目すべき, また個別的な検討に値するいくつかの示唆的な点がある。コムーネ間の戦争, したがって最大多数の人々を武装させることで, 強力で豊富な軍事力を調達する必要性は, 民衆層に彼らの力を自覚させるとともに, 彼らの絆を強化したのである (つまり, 集団や党派の緊密で強固な形成を促進するものとして機能したのである)。兵士たちは, 平時においても, 軍役のためであれ, 連帯感の高揚を伴う特別の利益追求のためであれ, その結束を維持した。「兵士組合 Societa' d'armi」の規約が存在しているが, それはボローニアで1230年頃に形成されたようであり, それには彼らの結束の性格や設立の形態が明確に示されている。この兵士組合は, 13世紀半ばにはすでに24存在しており, (組合員が)住んでいる街区 (contrada) に基づいて配置されていた。彼らは, コムーネを外敵から防衛するという政治的任務のほかに, 貴族や有力者の侵害行為に対して民衆層を擁護するという治安上の目的も持っていた。これらの組合の各条項には一たとえばレオーニと呼ばれた組合—その見出しに, 次のような表題が付けられている。「組合員に与えられる援助について」, 「不当な苦しみを受けたものはすべて組合員によって救

済される」。

また公民的・社会的承認には、誓約以外に、ミサや聖務日課の行事に共に参加するという宗教的承認が付け加えられていた。また他方では信心深い信者会には共通する、貧しい会員の救護や死者の埋葬という共通の義務は、彼らの団結を絶えず持続的で強固なものにした。

この組合の役割それ自体から、組合の範囲を超えた意義を持ち、コムーネの諸制度の中にその場を見出すことになる職務や評議会 (*consigli*) が形成された—たとえばポローニアでは、同業組合の規約やそれより古いコムーネの規約に基づいて、4人ないし8人の幹事会 (*ministerales*) が形成された。

この組合には、もともとたとえ少数とはいえ貴族の騎士 (*milites*) が、平民である歩兵、兵士 (*pedites*) とともに加入していた。しかしながらシエナのごとく騎士すなわち貴族は徐々に離反するようになるか、または1270年のポローニアのごとく、組合から除外されるような事例も生じてきた。この組合の限界や形態を克服しつつ、解放運動が前進するにつれて、平民層は重要な公職への参加を要求し、獲得した。平民層はこれまで以上に真の政治的党派に組織され、その活動に最大限の効果と集中性を与えるために、「市民隊長 (*il capitano del popolo*)」という役職が作られた。シエナは、このことをピサから得たようであり、名称においても役割においてもその軍事的・政治的な起源と役割がともに示されている。平民層はすでに散発的ではあるが、その時々武装し、団結し、結集し、独自の決議を採択していたが、それは独自の機関として組織され、独自の法さえも制定するようになった。「コムーネの鐘がよく聞こえないときに」独自の召集の鐘を鳴らした。かくして

ポデスタ (行政長官) と対立し、通達を公示する権利に異議を申し立て、あるいは市民隊長はポデスタと「和平」を締結した。平民層がコムーネ当局から要求どおりの改革を獲得できなかった場合は、コムーネの有力者の支持のもとにコムーネを離脱し、独自の議会を設立し、またコムーネの司法長官に似た独自の司法官を設け、「市民隊長」に司法権を授与し、その権限に関する審議を開始し、(1255年から) あらゆる立法的活動を開始した。(これらの資料は、シエナのコムーネのものである)。平民層は、それまではその加入者と内部的慣行を規定していた諸規定を、当初は事実上、のちには公的なものとしてコムーネの全般的規約として承認させることに成功する。したがって平民層は、1270年以降のシエナ、「神聖なる」法と「最も神聖なる」法をもつポローニア、「正義の法」をもつフィレンツェのごとく既存の支配階級を圧倒してコムーネを支配するようになるのである。(シエナのプロヴェンツァン・サルヴァーニは平民層の指導者である貴族である)。

すでに言及した研究で、チコッティが指摘しているローマ史の諸問題の大部分は (タナクイッラなどのような「個人的な」エピソードの検証は別として)、従属的社会諸集団の諸事件や諸制度 (護民官などのような) に関連している。したがってチコッティが主張し、理論化した「類比 (アナロジー)」の方法は、若干の「類推的」な結果をもたらしうる。というのは従属的諸集団は、政治的自律性が欠如しており、彼らの「防御的な」イニシアティブは、固有の必然性の諸法則によって制約されるからである。それは支配階級のイニシアティブを方向付け、条件付ける歴史的必然性の諸法則に比してより単純かつ限定的であり、政治的に抑圧的である

からである。従属的諸集団は、その起源においてしばしば支配的諸集団とは異なる異人種（異なる文化、異なる宗教）であり、奴隷の場合のようにしばしば異人種の混合である。ローマ史における女性の重要性の諸問題は、従属的諸集団の歴史に似ているが、それはある時点までである。「男性中心主義」は一定の意味においてのみ階級支配に比すことができる。つまりそれは政治史や社会史よりも風俗史にとってより重要性をもっているのである。

解釈の基準としての歴史的類比（アナロジー）の方法に付き物の危険性を明確にするには、他の探究の基準についても考慮しておくことが必要である。つまり古代国家および中世国家において、政治的一領土的であれ、社会的であれ（しかもその一方は他方の関数にすぎないのだが）、中央集権化は最小であった。国家は、ある意味においては、諸社会集団の、かつしばしば異人種間の機械的同盟（ブロック）であった。従属的諸集団は、特定の時期にだけ強力な形態で行使される、政治的一軍事的圧迫の枠内において、独自の生活を維持し、また独自の諸制度を持つこともあった。また時にはこれらの諸制度が国家的機能を持ち、国家を副次的ではない異なる機能を持つ諸社会集団の連合体とした。このことは危機的な時期には、「二重政府」という現象を際立たせることとなった。それぞれ独自の組織的集団生活から排除されていた唯一の集団は、古典古代世界においては奴隷集団（または奴隷ではないプロレタリア）であり、中世の世界においてはプロレタリア、農奴、小作農の集団であった。しかしながら古代の奴隷と中世のプロレタリアが多く の点で、同じ条件であったとしても、かれらの地位は同一ではなかった。つまりチョンピの企ては、たしかに古

代の奴隷たちの同じような企て（平民との協力の下で政府に承認を迫ったスパルタカスなど）が与えたほどの衝撃をもたらさなかった。中世においては、プロレタリアと平民（Popolo）との同盟、さらには君主の独裁へのプロレタリアの支持が可能であったのに対し、古典古代においては、奴隷にとって同様なことはありえなかった。近代国家は、諸社会集団の機械的同盟を、指導的・支配的集団の動的ヘゲモニーに従属させ、それにより従来の自治を根絶するが、しかしながらそれは政党や組合や文化的結社（アソシエーション）などの新たな形態で再生している。現代の独裁は、これらの新しい形態の自治を法的に廃止し、それらを国家活動に吸収しようと力を入れている。国民生活全体が、法的に支配的集団の手中に集中されると、それは「全体主義的」となるのである。

5 第5草稿 「方法的諸基準」

指導的諸階級の歴史的統一は、国家において実現され、その歴史は本質的に国家ないし国家群の歴史である。このような統一の形態は単なる形式上にとどまらない重要性を持っており、こうした統一をたんなる法的、政治的なものと考えてはならない。基本的な歴史的統一は、具体的には国家ないし政治社会と「市民社会」との有機的諸関係の結果なのである。従属的諸階級は、明確に言えば、統一されておらず、「国家」に転化しない限りは、自らの統一も実現しないのである。つまり従属的諸階級の歴史は、市民社会の歴史と交錯しており、市民社会の歴史の、また市民社会を媒介とする国家と国家群の歴史の「断片的」で、非連続的な一関数なのである。したがって以下の点を研究することが

必要である。

- (1) 経済的生産の世界で生起する発展と変動による従属的社会諸集団の客観的形成、その量的な拡大、および彼らが一定期間その心情や、イデオロギー、目標を継承するその起源となる、先在の社会集団について。
- (2) これらの主要な政治組織への積極的ないしは消極的参加。自己の要求を反映させるための、これら政治組織の政綱（プログラム）に影響を及ぼそうとする企図。かつこのような企図が、既存の政治組織の解体、刷新、新たな形成などの過程にどのような結果をもたらしたか。
- (3) 従属的諸集団の合意と統制を維持するための、支配的諸集団の新しい政党の形成につて。
- (4) 限定的かつ部分的な性格の諸要求のための従属的諸集団の独自組織について。
- (5) 古い枠組みにおいてではあるが、従属的諸集団の自律性（autonomia）を主張する新たな組織について。
- (6) （従属的諸集団の）総合的な自律性（autonomia integrale）を主張する組織について、等々。

以上の諸局面の一覧表は、中間的諸局面や、諸々の局面の組み合わせによってより正確なものにすることが可能である。歴史家は、もっとも初歩的な局面から総合的な自律性にむけての発展の行路に注目すべきであり、かつそれを擁護すべきであり、またソレル的な「分裂の精神」のいかなる表れに対しても注目すべきである。それゆえに、従属的諸集団の諸政党の歴史もまたきわめて複雑である。つまり従属的諸集団のあらゆる領域の総体において、その政党活動のすべての影響を含まねばならず、また支配

的諸集団の態度も含まねばならないからである。また国家によって支援されているからこそより効果的な活動が可能な支配的諸集団の、従属的諸集団とその政党にたいする影響についても含まねばならないからである。

従属的諸集団のなかで、あるものは政党を通じて一定のヘゲモニーを行使するか、または行使しようと試みるであろう。他のすべての政党が、ヘゲモニー集団の要素とこのようなヘゲモニーの影響を受ける他の従属的諸集団の要素を含む限りで、その発展を研究し、明確化する必要がある。歴史研究の多くの基準（canoni）は、民族的なりソルジメント運動を指導したイタリアの革新的諸勢力の考察から形成することが可能である。これらの諸勢力は、他の特定の諸勢力と戦いつつ、援軍や同盟軍に支援されて権力を掌握し、イタリア近代国家に統一されたのである。国家となるためには、ある勢力を従属させ、またある勢力を排除しなければならなかったし、他の勢力からの積極的あるいは消極的な合意を得なければならなかったのである。この革新的諸勢力の、従属的諸集団から指導的かつ支配的諸集団への発展の研究は、打倒すべき敵に対して自律性（autonomia）を獲得し、積極的あるいは消極的な支援を得た諸集団を融合する諸局面を研究し、解明しなければならない。つまり諸勢力の国家的統一においては、このような過程全体は歴史的に必然的なことであったからである。革新的諸勢力が、諸々の局面を通じて徐々に到達した歴史的一政治的な意識の水準（程度？）は、まさにこの二つの指標で測られるのであり、かつての支配的諸勢力との断絶という指標のみによるのではない。通常この基準のみに依拠するために一面的な歴史把握となり、コムーネ（都市国家）時代以降のイタ

リア史の場合のように、まったくなら理解されないこともあるのである。イタリアのブルジョアジーは、自己のまわりに民衆を統一することができず、このことが彼らの敗北や発展の挫折の原因であった。リソルジメントにおいても、このような偏狭なエゴイズムが、フランスのような急速かつ強力な革命を妨げたのである。この点に、従属的社会諸集団の歴史形成、したがって諸国家の歴史形成（過去の）における、最も重要な諸問題のひとつ、最も重大な困難の原因のひとつがあるのである。

6 第6草稿 「ローマ時代の奴隷」

1 カエサルの体験的な観察（『ガリア戦記』I, 40, 5）は、スパルタカスとともに蜂起した奴隷たちの中核が、キンプリ戦争の捕虜であったという事実を伝えている。これらの反乱参加者は全滅させられた。（テニー・フランク『ローマ経済史』、イタリア語版、ヴァレッキ社、p.153 参照）。このフランクの著書の同じ章における、奴隷たちの多様な出身民族によって異なる運命についての、考察と推定について検討すべきである。また全滅させられなかったものたち、あるいは先住民たちに同化するか、先住民に取って代わったものたちのありうる生き残りについての考察と推定についても検討すべきである。

2 ローマでは、奴隷は外見上見分けることは不可能であった。ある元老院議員が、奴隷たちにそれと区別できるような衣服を与えるべきであるという、元老院はそれに反対した。というのは奴隷たちが、自分たちの数が多数であることを知れば、彼らが危険な存在となることを危惧したからである。（セネカ『慈悲心につい

て』、I, 24, およびタキトゥス『年代記』、I, 27, 参照）。このエピソードには、一連の公然とした示威行動—宗教的行進、行列、大衆の集会、様々な種類の行進（パレード）、また部分的には選挙（若干の集団の選挙への参加）や人民投票などを引き起こす政治的—心理的要因が含まれている。

7 第7草稿 間接的資料

「『ユートピア』といわゆる『哲学的文学』」

(1)これらは政治的批判の発展の歴史のために研究されてきたが、注目すべきもっとも興味深い側面のひとつは、たとえ他の関心事に頭脳が支配されている知識人を通してであれ、最も底辺の集団も含む従属的社会集団の基本的で根源的な渴望を無意識的に反映していることにある。もし文学的、芸術的な重要性が皆無の著作をも考慮すれば、つまり社会的現象に関連する観点に基づけば、この種の出版物は膨大である。したがって第一の問題が提起される。つまりこのような文学作品の大量な（相対的に）出版は、特定の歴史的時期、政治的—社会的に根底からの変化の兆候に照応しているのか？ということである。それは漠然とした曖昧な「不平不満集」と、ある特殊な様式との統合と云うるであろうか？いずれにしても、この文学のある部分は、支配的諸集団の利害、あるいは権力を奪われた諸集団の利害を表現しており、またそれは保守的で反動的な性格を持っていることを考察すべきであろう。

これらの著作、つまり文字通り「ユートピア」的なもの、いわゆる哲学的小説、自国の慣習や制度に対置しようとする特定の慣習や制度を、遠方の国々や殆ど知られていないが実在す

る国々のものとする著作の一覧表を作成するのは興味深いことであろう。T・モアの『ユートピア』、ベーコンの『新アトランティス』、フェヌロンの『快樂の島』と『サレント』(さらに『テレマック』も)。スウィフトの『ガリバー旅行記』等々。イタリアの反動的性格のものについては、フェデリコ・デ・ロベルトとヴィットリオ・イムブリアーニの未完の作品(『ナウフラグツィア』、ジーノ・ドリアの序文付の未完の小説の一部、『ヌオーヴァ・アントロジア』1934年8月1日)を想起すべきである。

(2)『ヌオーヴァ・アントロジア』1930年8月1日号のジュゼッペ・ガブリエリの「アカデミア・デイ・リンチエイ会員フェデリコ・チェージ」に関する論文において、彼は反動宗教改革(Controriforma)(ガブリエリによれば、それは人文主義(Umanesimo)から刺激を受け、プロテスタンティズムによって束縛から解放された個人主義に対して、社会の再建(!)のために、集団的で規律的、組合的、位階性(ヒエラルヒー)的なローマ精神(!)を対置するものである)、諸々のアカデミー(チェージが取り上げたアカデミア・デイ・リンチエイのごとく、方法や形態において中世にとどまっている大学組織とはまったく異なる型の学者の集団的活動体)、および大理論、刷新的改革、人間社会のユートピア的再建(『太陽の都』、『新アトランティス』など)の理念と斬新さとの間の歴史的・イデオロギー的関連を主張している。

この関連性には、誇大で一面的、機械的、表面的なものが多分にある。最も有名なユートピアがプロテスタント諸国で生まれており、また反動宗教改革の諸国においては、ユートピアはむしろ反動宗教改革に根本的に反対する「近代的」精神の、一定の形での、唯一可能な表現で

ある(カンパネッラの全作品は、反動宗教改革をその内部から掘り崩す「巧妙な」仕事の記録である。とはいえ、それはあらゆる復古と同様に、同質的なブロックではなく、古いものと新しいものとの、形式上だけではなく本質的な結合であった)。ユートピアは個々の知識人によるものであるが、それらは形式的にはプラトンの『国家』のソクラテス的な合理主義と結合され、その時代の人民大衆の大部分の不安定で潜在的な反逆の状況を、きわめて変形されてはいるが、本質的に反映している。すなわち、それは最良の国家に到達したいという知識人たちの政治的宣言である。さらにその当時の科学的発見と、まさに反動宗教改革の時代にはじめて現れた科学的合理主義について考慮する必要がある。マキアヴェッリの『君主論』もまた彼らしい一つのユートピアであった(この点については、他のノートのいくつかの覚書を参照)。

人文主義はまさに、すなわちそれはある種の個人主義であるが、ユートピアと政治的・哲学的な構造の生成に好適な地盤であった。教会は、反動宗教改革とともに、「有力者」に奉仕するため、「下層」の大衆から決定的に離れた。個々の知識人は、ユートピアを通じて、下層の人々の一連の死活問題の打開策を見出そうとした。すなわち彼らは、知識人と民衆との間の連携を追求したのである。したがって、彼らはジャコバン派とフランス革命の、つまり反動宗教改革に終止符を打ち、プロテスタント的な異端よりもはるかに効果的に教会に反対した、自由主義的異端を普及した事実の、最初の歴史的な先駆者と見なされるべきである。

(3)『ヌオーヴァ・アントロジア』1928年5月1日号の、アントン・フランチェスコ・ドーニについてのエツィオ・キオルボリの論文。それ

は彼の時代つまり16世紀に大変人気があり、ユーモアと辛辣で近代的精神をもった著述家の人物伝である。ドーニは、広範な分野のきわめて多くの問題に関心をもち、それらは多くの科学的刷新を先取りするものであった。それは今日では唯物論的（俗流的な）とでもいうべき傾向であり、カンペール（ベトゥルス、オランダ人、1722-1789）よりも2世紀前に顔相の角度と犯罪者特有の人相の重要性について示唆しており、また彼はラヴァテール（ヨハン・カスパール、スイス人、チューリヒ生まれ、1741-1801）やガル（フランツ・ヨーゼフ、ドイツ人、1758-1828）の2世紀半前に、知性の機能とそれを担う脳の役割について語っていた。彼は『狂気あるいは思慮ある世界』においてあるユートピア—「今日の社会主義が熱気をおび、虹のように多彩で多くの苦惱で描かれる想像上の社会的再建」—を書いたが、それはおそらくモアの『ユートピア』に依拠したものである。彼はモアのこの著書を知っており、ランドのイタリア語の訳書を自ら刊行した。「しかしながら想像力は、プラトンの『国家』における想像力と同一ではなく、その他の無名の忘れられた人々の想像力とも同一ではないように、同じではない。彼は、彼なりに別の想像力、彼自身の想像力を活性化させるよう、想像力を形成、再構成、再生したのである。それは、彼の『大理石』において、さらに、徐々に他の多くの作品や小冊子のなかで、それぞれの場面や、あれこれの感情に現れ出ることが理解できるのである」。ドーニの著作目録は、ラテルツァ（出版社）の「スクリットーリ・ディタリア（イタリアの作家たち）」のキオルボリ編の『大理石』およびトレヴィスの「ピュー・ベッレ・パージネ（より美しい著作）」として刊行されたドーニのアンソロ

ジーを参照。

(4)シェークスピアの『テンベスト』（キャリバンとプロスペロとの対立、など。ゴンザーロの演説のユートピア的性格）。『ヌオーヴァ・アントロジニア』1928年8月1日号のアキッレ・ロリア「シェークスピアにおける経済思想と経済的テーマ」参照。これは政治的—社会的性格のシェークスピアの最初の文章集として、また当時の民衆の思考様式の間接的な記録として利用することが可能である。『テンベスト』については、ルナンの『キャリバン』と『青春の水』を見ること。

8 第8草稿 「科学主義と後期ロマン主義の後遺症」

犯罪問題に重点的に取り組んだイタリアの左派的社会学の傾向を検討すべきである。これは、当時科学の最高の表現とみなされ、また彼らのあらゆる専門的で奇抜な見解（直訳すれば「専門的な歪曲」の意）と特異な問題設定によって影響力を保っていたロンブローゾとその最も「優秀な」弟子たちが左派的傾向に参加したことと関連性があるのだろうか？あるいは1848年の後期ロマン主義の遺産なのだろうか？（スュー、小説化された刑法という彼の苦心の作品）。またはイタリアでは多数の流血犯罪が一定の知識人集団に「衝撃を与え」、この「野蛮な」現象を「科学的に」（つまり自然科学的に）説明することなしには前に進むことは出来ないと彼らが考えていたことと関連があるのだろうか？。

【付記】「サバルタン・ノート」の訳文については東京グラムシ会『獄中ノート』研究会の冊子（1999年）を参照した。